加藤周一著作集

3 加藤周一著作集

小説・詩歌

加藤周一 編集

加藤周一著作集13（全15巻）
小説・詩歌
一九七九年四月二〇日　初版第一刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八―一九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1979　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

ある晴れた日に　3
人道の英雄　217
三題噺　257
詩仙堂志　259
狂雲森春雨　293
仲基後語　315
『三題噺』あとがき　393
対話——Berlin　409
花の降る夜のなかで——Leningrad　427

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

詩 441
四つの四行詩 443
妹に 446
さくら横ちょう 449
雨と風 451
愛の歌 453
優しく甘い恋の歌 456
逝く年の夜の果に 466
異郷の空二題 472
歌 473
布哇 475

信濃路 476
彦根 477
京都 478
東京 479
信濃追分 480
北太平洋 481
不忍の池 482
長崎 483
あとがき 485
初出一覧 488

加藤周一著作集 13

小説・詩歌

ある晴れた日に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

I

1

土屋太郎は、落葉松の林の間にどこまでもつづく坂道を辿りながら、支那にいる友人関哲哉の身の上に、とりとめのない思いをめぐらせていた。死んだのか。せめてまだ生きていてくれるのか。いずれ、よい報せであるはずもなかろうが――関は友だちの少い太郎の親友、親友というのは、何か他のものであるような気もしたが、もし親友が太郎にあるとすれば、ただ一人の親友であった。身体が弱く、彼自身と同じように徴兵検査は丙種で、同じように戦争を憎み、同じように強情で、それから……灰色の空に祈武運長久という旗が申しわけのように立って、戦闘帽をかぶった男が半ダース、赤ん坊を背負った女が一ダースほど勝手に喋りながら集った空地で、皆さんありがとうございました、行ってまいります、と新聞を読むようにいった関、一年前に支那へ行った関にどういうことが起ったか、いや、どういうことが起っているのか。とうとう来たねと

投げだすように呟いてポケットから引きだしたもみくちゃの赤い紙が一つの青春に約束したもの。太郎はポケットから、もう何度読み返したかわからない葉書をつかみだした。紙が折れてインクの消えている所がある、あまり上手でない女の字。弟のことでなるべく早く相談したいというその簡単な走書きの文字の意味は、姉のあき子に会えばわかる。速達の赤いスタンプの下に書いてあるホテルまで、もう遠くはないと、太郎は昔バスで行った道程を想い出しながら考え、肩にくいこむように重くなって来た背負袋をおろして、立ちどまった。なにも急ぐ必要はなかったが、長く気がかりになっていた速達の内容を早く知りたいという気持にせきたてられて、絶えず登りの坂道を急いで歩きだしてから一時間近くになる。汗ばんだ額に、休むと急に風の冷さが感じられた。

四月の落葉松の林は煙るような緑の芽をふきだしている。青い空はその上に拡り、流れるともなく流れる静かな白い雲のかたまりを浮べている。この林とこの春の空とは、前に見たことのある風景だと太郎は思う。足の下に焼石のくずれる道も、白樺の濡れたように光る白い木肌も、行手の空を劃して浅間の描くなだらかな線も。しかし、何かが変化している。何もかも同じものばかりがある風景にちがいないが、何か種類の異る光に照されたようなある微妙な変化が、前に見た風景と今眼の前にある風景とを区別しているように思われる。夏見ることに慣れているからだろうか。下草も枯れ、落葉松の芽はようやく萌えだしているが、林もまだ明るく枝を透している周囲を見廻し、葉の落ちた白樺の枝の網の目を透して青い空を見上げていると、この高原に過し

た幾年の夏が俄に活き活きと想い出される。朝の露に濡れた秋草や、白樺の葉にきらめく真昼の光や、小径から突然現れるラケットを持った少女たち。林の中に見え隠れする山荘の窓は開き、赤いスウェーターの動くのが見え、愉しそうな笑い声が遠い郭公ののどかな鳴声と交りながら流れていた。もうそんなものはない。早い鶯と落葉松の若芽と……今年も夏は再び来るであろうが、その愉しそうな笑い声を、己の運命を知らない人々の無知による幸福だといった関哲哉の白皙の顔が、再び同じ樹かげで、西洋の古い詩集の上に傾くことはないであろう。太郎は深く息を吸いこみ、嘗て華やかに、浮薄に、色とりどりに、笑いさざめく多くの人々を乗せた大型のバスの車輪が火山灰の道に深く掘った溝を眺めた。寂莫の色は、天と地との明るさにも拘らず、あたりを浸している。昔のものは何処にもない、自然も同じ自然ではない、何もかも同じ風景がそのまま全く別のものに変ってしまった。戦争のはじまったとき、街の風景が突然変ったように。あるよく晴れた日、自転車の男も、並木も、商店の窓ガラスも、戦争のはじまったことをラジオで知った瞬間から、異様に鮮やかな光を浴び、何か再び見ることのできない貴重な光景のように、特殊な意味を帯びて見えはじめた……

太郎は、自分が今朝死んでいたかも知れないということを急に想い出す。朝、出かけてくるときの上野駅。四月の短い夜は早く明けても、寝られるうちに寝ておこうというのか人通りの絶えて白々と寝静まった東京の街のなかで、上野駅だけは何時乗れるかわからない汽車を待つ人の群が、身動きもできないほどつめかけていた。背負袋や風呂敷包やそれぞれ持ち切れるだけの荷物

を持ち、なかには簞笥をかついだ男、子供を二人、束にして背負った女、背中の夜具の下でつぶれそうな少年もいた、それが少しでも動くたびに、押しあい、ぶつかりあい、罵りあい、いや、大抵の男も女も、埃と煙草と騒然たる物音とのなかに、じっと動かず立ったまま眠り、人の股の下にうずくまり、もうこのまま石と化して永久に動かないかのように、途方もなく広い改札口の前の大屋根の下に荷物のようにならんでいた。関哲哉の姉から速達をもらい、ようやく病院のつとめに暇を得て信州へ行く決心はしたものの、途中で何が起るか知れたものでなく、鉄道は何時遮断されるか、帰りはいつか、そもそも帰るべき家が東京にいつまであるか見当もつかぬ。大事なものといっても別になかったが、あるだけの金に持っていた米や罐詰の類を背負袋につめ、シャツやスウェーターも入れて肩に喰いこむほど重いやつをかついだ。上野駅の雑踏のなかで待つより手はないとあきらめて、辛うじて探しだした目的の汽車のための列に加ったときには、東京に格別の未練もなく、汽車の出るまでに何事もなければよいとただそれだけが願いであった。ところが列に加り、背負袋をおろすや否や、サイレンが鳴ったのである。ざわめきがしばらくやみ、男や女や荷物の間に一瞬息を飲んだような静けさが来た。誰も動かず、後はもと通りの、全くもと通りのざわめきである。しゃがんでいたもんぺの女が起ちあがって、どうしようといった。駅が爆撃の目標になれば、蔽いといってはガラスの屋根があるだけで、狙われれば、忽ち、首や胴や、戦闘帽やもんぺや、ありとあらゆるものが血まみれになってとび散り、雑踏で急に動けるはずもないから、頭の上に降りかかり、かりに一発で死なないとしても、踏み倒しあう人の波のな

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo